2022 年度　教員の自己点検・自己評価計画書

所属学部　学科	職位	氏　　名
人間健康学部 人間健康学科	助教	木野村 嘉則
最終学歴	学　位	専門分野
筑波大学大学院体育科学研究科 スポーツ科学専攻修了	修士 （体育学）	体育方法学

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

真に信頼して事を任せうる人格の育成を中心として，人材育成を行う。

（目標）

スポーツを指導する立場となるための基礎知識を教授し、指導者としての態度を育成する。この際には、建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」が重要となること理解させる。特に専門演習に際しては、興味があるテーマを見つけ、論理的な問題解決を行えるように指導し、校訓の「真面目」にあるように真摯に取り組み結論まで想定した取り組みを行えるよう工夫する。

（方針）

スポーツや体育の指導の実践的専門家の養成を念頭に置き、学生が責任を持った行動を行えるよう教育手法を配慮する。

（計画）

講義では、スポーツのコーチングやトレーニングに関する実践に関する事例を用いながら、学生が理論について具体的なイメージを持てるよう工夫する。今年度は、Teams を利用しながら、の授業となる。昨年度までの経験を基に、授業資料の展開、学生とのやり取りに活用したい。このことは演習でも同様である。

演習では、自ら考え情報収集し行動する資質を高めること促し、収集した情報から意見を作り上げた後に他者に伝えることに取り組む。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

トレーニング科学、バイオメカニクス、コーチング論、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

専門スポーツ実習（陸上競技）、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

Teams を活用しながら、授業資料や課題の展開を行った。また、専門演習では共有ドライブを活用し、学生が主体となって研究を進めていくことをサポートした。

○作成した教科書・教材

基礎演習Ⅱ学部用授業テキスト

人間健康学授業用教科書（「運動を測定し定量的に評価する」）

○自己評価

講義科目は数年ぶりの対面授業となったが、その間に学生はオンライン授業に慣れ、対面授業に不慣れとなってしまったように感じた。主に前期中にこうした変化に気づきながら、授業における相互のやり取りを増加させることなどで対応を図った。部分的には対面授業への適応に関する課題を解決できた。

今年度は過去に私の専門演習にて学んだ学生が博士号を取得した。本学卒業生では初めてのことではないかと思う。大学院進学後の本人の努力，大学院での教育プログラムの賜物であると思うが，そこでの活動の土台作りが成功したことによるものともとらえたい。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

反動動作特性のトレーナビリティの検討

陸上競技の指導力向上に関するアクションリサーチ研究

○目標・計画

（目標）

前者は、爆発的なパワー発揮に関連したデータを基に論文投稿する

後者はビデオ会議でのデータを整理して論文作成を行う

（計画）

前者はジャンプに関する縦断的データを基に、ジャンプ力の特性の変化を明らかにする

後者はビデオ会議を基にエピソードを記述する

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・「運動を測定し定量的に評価する」第 6 章『人間健康学』西尾敦史，大勝志津穂，尚爾華　編．唯学書房，pp, 100-116，2023.

・「指導者がもつ健康の運動指導上の位置づけ―高齢者と青少年対象の指導者の事例をとおして」第 12 章『長寿社会を生きる―地域の健康づくりをめざして』尚爾華，澤田節子，谷村祐子，肥田幸子，中野匡隆，木野村嘉則　編．唯学書房，pp, 100-116，2017.

（学術論文）

・長谷川貴大，木野村嘉則，眞鍋芳明，木越清信，渡辺輝也．MCT-jump test にて評価されるパワー発揮特性のトレーナビリティ―男子大学生短距離走競技者を対象とした事例的検討―．陸上競技学会誌，23，pp33-44，2023.

・小嶋季輝，上赤祐司，小山雄三，木野村嘉則．中学校 3 年体育授業における多視点型教材「背面跳び」の効果検証．体育学研究，67，pp213-233，2022.

・小嶋季輝，上赤祐司，小山雄三，木野村嘉則．人間による人間の研究，その方法と方法論: 単一の学習者現実の一般的調査方法の提案．東邦学誌，vol.50(1), pp71-82, 2021.

・Kenta Hato and Yoshinori Kinomura. Ball speed and spin rate during repetitive pitching by baseball novices. Journal of Physical Education and Sport. 21（supplement issue 3）,pp. 2081-2086, 2021

・Masanori Kojima, Yoshinori Kinomura, Kenji Kuzuhara. Development of observational indicators for evaluating handstand posture in the mat exercise in physical education class: validity and reliability. Journal

of Physical Education and Sport. 21（supplement issue 3）,pp. 2087-2096, 2021

・Yoshinori Kinomura, Saburo Nishimura, Haruhi Kataoka, Shuhei Iida. The influence of vertical jump ability on spike jump height with an approach run in female volleyball players. Serbian Journal of Sports Sciences. Vol. 12（1）,pp. 11- 16, 2021

・Saburo Nishimura, Tomoyo Miyazaki, Yoshinori Kinomura, Tomohiro Kizuka, Yoshinori Okade. Identifying an effective technique to improve the sprinting performance of male high school students who have a low sprinting ability. Journal of Physical Education and Sport. 20（supplement issue 3）,pp. 2021-2029, 2020, doi:10.7752/jpes.2020.s3273

・Saburo Nishimura, Yoshinori Kinomura, Yasuto Kobayashi, Rei Matsuzaki, Shoichi Matsushita, Nobuyuki Ikeda. Learning Outcomes for Physical Education in Long Jump: Is it Possible for 5th Graders to Learn Take-off Techniques that Enable Greater Vertical Velocity? International Journal of Sport and Health Science.vol.17, pp.A37-A53, 2019

・小嶋季輝，上赤祐司，小山雄三，木野村嘉則.「深い学び」の実現に向けた授業改善の方途の提案：中学校 3 年「走り高跳び」「背面跳び」の学習を事例として．東邦学誌，vol.48, pp71-91, 2019.

・相川悠貴，木野村嘉則，兼安真弓．2 型糖尿病モデルラットの糖代謝異常発現に対する田七人参摂取と運動の効果．紀要，Vol. 66 ， pp.1-8, 2018.

・木野村嘉則，木下達生，波戸謙太，葛原憲治．野球における二塁までのベースランニング時の走塁コースの分類に関する試案：中学生及び高校生による自由走路疾走条件を事例として．東邦学誌，Vol. 46（2） pp.93-104, 2018.

・西村三郎，木野村嘉則，松崎鈴，松下翔一，池田延行．小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びにおける助走歩数が跳躍距離に与える影響. 国士舘大学体育研究所所報, Vol.36, pp.35-42, 2017

・西村三郎，木野村嘉則，小林育斗，松崎鈴，松下翔一，池田延行．小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びの体育授業における学習成果の検討：より大きな鉛直速度を獲得できる踏切は学習可能か？体育学研究，Vol. 62（2）, pp.647-663, 2017.

・藤林献明，木野村嘉則，図子浩二．ジュニア男子アスリートを対象とした Rebound Long Jump Test と疾走及び水平跳躍能力との関係．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，Vol. 14, pp.105-114, 2017.

・古市直樹，鎌田公寿，木野村嘉則，小嶋季輝．教室環境における共同注視に関する共同分析による試論．琉球大学教育学部紀要，Vol. 90, pp.9-26, 2017.

・鎌田公寿，木野村嘉則，小嶋季輝．小学校道徳教育において育まれるケアの実際―理論的枠組みを用いて抽出･分析した 2 事例の比較検討を通して―. 未来教育研究所紀要, Vol. 4, pp.5-14, 2016.

・鎌田公寿，木野村嘉則，小嶋季輝．小学校道徳教育における「ケアされる人」の発達動態―子どもの主観に着目した調査に基づいて―．琉球大学教育学部紀要，Vol. 88, pp.257-266, 2016.

・古市直樹，鎌田公寿，木野村嘉則，小嶋季輝．教室場面における共同注意の分析方法に関する試論．東邦学誌，Vol. 45, No.1,pp.29-47, 2016.

・鎌田公寿，木野村嘉則，小嶋季輝.「ケアされる人」がケア主体へと発達する契機を分析するための枠組み：道徳教育における Noddings 理論の援用妥当性を論点として．琉球大学教育学部紀要，Vol. 87， pp.113-120, 2015.

・鎌田公寿，小嶋季輝，木野村嘉則．道徳教育におけるケア場面を抽出するための枠組みの構築―Noddings の理論に依拠して―．東邦学誌，Vol. 44, No.1, pp.71-86, 2015.

（学会発表）

・Yoshinori Kinomura, Saburo Nishimura, Matsuzaki Rei, Matsuhita Shoichi, Kataoka Haruhi, Iida Shuhei. Characteristics of jump ability in female volleyball players. The 2019 International Conference for the 8th

East Asian Alliance of Sport Pedagogy. p.123, 2019.

・Shoichi Matsushita, Yoshinori Kinomura, Saburo Nishimura, Haruka Kataoka, Rei Matsuzaki, Shuhei Iida. Characteristics of female volleyball players with high efficiency of arm swing and counter movement in the vertical jump. The 2019 International Conference for the 8th East Asian Alliance of Sport Pedagogy. p.122, 2019.

・熊野陽人，下嶽進一郎，木野村嘉則，東中友哉，松尾彰文．走幅跳の助走において選手の感覚とデータは一致するのか？―各歩の助走速度と接地時間に着目して―. 日本陸上競技学会大会第 17 回大会，p.28，2018

・木野村嘉則，下嶽進一郎，熊野陽人，松尾大介，越川一紀，松尾彰文．プライオメトリクストレーニングにおける力発揮特性の経変変化～自己記録を向上させた選手の特徴～トレーニング科学，Vol.30(3)，p.173，2018

・Yoshinori Kinomura, Natsuki Sado. Case study of the effect of high-intensity intermittent exercise on the distance traveled during high-speed running in a football game. 2018 KNSU International Conference – Asia-pacific Conference on Coaching Science – Constructing a happy sport field of future generations. pp.76-77, 2018

・Saburo Nishimura, Yoshinori Kinomura, Shoichi Matsushita, Rei Matsuzaki, Nobuyuki Ikeda. Influence of approach distance of long jump on jump characteristics of 5th graders. 2018 KNSU International Conference – Asia-pacific Conference on Coaching Science – Constructing a happy sport field of future generations. pp.132-133, 2018

・小島正憲，葛原憲治，木野村嘉則．初心者の倒立における評価指標の提案．日本体育学会大会予稿集，Vol．68，p.235, 2017.

・波戸謙太, 木野村嘉則. 野球初心者の全力投球からみたスピードトレーニングの適正反復投球数, 日本体育学会大会予稿集．Vol．68，p.235, 2017.

・木野村嘉則, 波戸謙太. 全国高校野球選手権において無死 1 塁場面で用いられた攻撃戦術の分析, 日本体育学会大会予稿集．Vol．68，p.235, 2017.

・Nobuaki Fujibayashi, Mitsuo Otsuka, Yoshinori Kinomura, Shota Sakaguchi, Tadao Isaka. Coaching method of triple jump takeoff in frontal plane movement-Evaluation using side-inverted pendulm model. The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education and The 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference, Vol. 60, p.63, 2015

・Yoshinori Kinomura and Nobuaki Fujibayashi. Analysis of the takeoff motion in long jump and high jump among students-High jump for learning to takeoff powerfully in long jump- The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education and The 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference, Vol. 60, p.62, 2015.

（特許）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

・令和 4 年度科学研究費助成事業基盤研究 C 申請－不採択

・令和 3 年度大学体育研究助成―採択

・平成 31 年度科学研究費助成事業若手研究申請－不採択

・平成 30 年度科学研究費助成事業若手研究申請－不採択

・平成 29 年度科学研究費助成事業若手研究申請－不採択

・平成 28 年度科学研究費助成事業若手 B 申請－不採択
・平成 27 年度笹川科学研究助成申請―不採択
・平成 27 年度大幸財団人文・社会科学系学術研究助成申請―不採択
・平成 26 年度科学研究費助成事業研究活動支援スタートアップ申請―採択

○所属学会

日本体育・スポーツ・健康学会，日本コーチング学会，日本トレーニング科学会，日本スポーツ教育学会，日本教材学会，日本体育科教育学会,日本スポーツパフォーマンス学会，日本バレーボール学会

○自己評価

計画から遅れ、論文化が進まないテーマがある。また、科研費への応募自体ができなかった。いくつか論文化されたテーマの研究もあるものの、今後研究に関してペースを高めることができるよう業務全体の取り組みを見直したい。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

所属委員会、大学および学内事業にて、情報の確認・把握をしっかりと行い役割を果たす。また、学外授業やオープンキャンパスなどの学外者への講義に際しては、社会貢献の舞台でもあるととらえ、大学での学修を紹介する。

（計画）

中高教職課程部会や、基礎演習運営 WG、学部 IRWG にて自身の役割を果たし、貢献する。

○学内委員等

中高教職課程部会

○自己評価

中高教職課程部会では、教職課程の運営に際して Teams などの活用を推進した。次年度にも引き続き、学生の支援を継続した。基礎演習運営 WG として、次年度の担当者に引き継ぎやすい教材を作成し共有した。資料を活用すれば。次年度以降の担当者の業務負担を軽減できると評価する。学部 IR の WG として、前年度に引き続いた調査を担当し、高い回答率での調査の実施を継続できた。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

研究成果を社会活動に活かす。学外授業などに積極的に参加し、専門分野を社会に広める。クラブチームでの小学生へのサッカーの指導を継続する。この際には、子弟を教育するは天に事うる職分であると捉え、広く社会に報告できる取り組みを目指す。また、同様に事例対象者を中心として陸上競技者，陸上競技の指導者へのサポートを行う。

（計画）

学外授業にて高校生と接する際には、スポーツ科学分野に興味を持てるような授業を心がけ、進路

選択の一助となるよう取り組む。スポーツの指導においてはサポートに際して、専門分野の知見の提供を求められているため、相手に伝わるように知見提供を行うとともに、実践上に現れる問題や課題について一緒に解決に向けて取り組んでいく。

〇学会活動等

学術論文の投稿

〇地域連携・社会貢献等

少年サッカークラブの指導、高校陸上部指導者へのサポート

〇自己評価

研究成果の発表が遅れている。社会貢献活動は自身の専門領域にて継続的に実施できている。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

Ⅵ　総括

学内業務については、次年度に私が担当したり，あるいは別の担当者が担当した時にも業務がスムーズに進むことを念頭に置きながら進めた。今後も迅速に他の業務に時間を捻出できるように工夫していきたい。特に研究活動に時間を割き、成果を公表できるように努力したい。

以　上